

後立山連峰北部縦走

岩井 淑

昨年、劔岳に登った。山頂からの360度の大展望の中で南側に紺色のシルエットとして浮かび上がる連峰があった。それらは俗に後立山連峰と呼ばれているもので、朝日岳、白馬岳、唐松岳、五竜岳、鹿島槍ヶ岳、爺ヶ岳、針ノ木岳へと続いている。それらの峰々を眺めているうちに、来年はあの稜線をパーティーを組んで歩こう、と決めたのであった。

毎年恒例となっている職場の仲間と一緒に夏山の3000mを酒を飲みつつ歩こうではないかいは、今回は日程の関係上、後立山連峰の半分、北部を車中1泊山小屋3泊の予定で縦走することになった。

通常、白馬岳に登る場合は90%以上が猿倉から大雪溪を登りつめていく。今回、その単調な雪溪登りを避け、榑池自然園から天狗平、乗鞍岳、白馬大池を経て新潟県の最高峰である小蓮華山山頂を踏んでから白馬岳へ登頂するという変化に富んだコースを設定した。このコースだと距離的には大雪溪を登るのに比べて50%増しとなるが、景観が抜群にいいのだ。高山植物の花々を眺めながらののんびりコースを設定したわけだ。

夏山登山とはいえ私達の場合は8月下旬に設定してある。山小屋では7月中旬から8月中旬までの約1月が最盛期であり、肩幅50cmが宿泊者1人ひとりの割当スペースとなる。まさにギュウ詰めのメザン状態となる。

7月中旬、梅雨明けとともに日本列島全体が小笠原高気圧の勢力圏に繰り込まれるや否や、人々は海に山にとドッと繰り出す。3000mの高峰も例外ではありえない。特に穂高岳、槍ヶ岳、白馬岳、劔岳を擁する北アルプスはどこへ行っても人々となる。その雑踏から逃がれ、山小屋でもゆっくりくつろぐにはどうしても期日設定を8月下旬にせざるをえない。

今回の参加者は初めて山に登るといふ初心者2名を含めて7名である。

小笠原父島から島に滞在すること6年ですっかり土着化し、真っ黒に日焼けした顔からニカッと白い歯が印象的な小沢。

昨年、劔岳登山では初登山ながらミレーのザック一式を取り揃え、ストローハットにバンダナもりりしい松田。

第1回の奥穂高岳登頂から6年連続して参加している大酒飲みだが心の優しい鎌倉。

モータードライブ付きの一眼レフを新たに購入し、やたらバシャバシャ撮りまくる腕っぷしの強いサングラスのポパイ吉原。

今回初参加。スキーが抜群に巧く真実一路のヌーボー沼沢。

若いながら口八丁手八丁で要領のいい碓井。彼も全くの初心者で初登山。

それにリーダーの私というパーティーである。例年だとこの他に赤石沢が加わっているのだが、彼は6月にNTT勤続20年をひとつの区切りとして居酒屋に職転してしまい、いろいろと忙しいようで残念ながら今回は不参加となった。彼は現在、新たな夢にチャレンジ中で、自らの身近雑感を記した『居酒屋通信』なるものを定期的に発行している。

このパーティーが次々と鎖や梯子が登場し、北アルプスでも北穂高岳から南岳間の大キレットと同様に悪場の代表的コースとされている不帰ノ嶮のキレットを含む後立山連峰北部を縦走するのである。今回も夜の新宿駅に集合しミーティングの名の下に、さっそく近くの博多風モツ鍋屋に入り込み前祝いの乾杯である。次の日は3000mの稜線を歩くので、ここで飲み過ぎると登りが非常にきついのだが、そんなことはおかまいなしにジョッキをかさねる。私たちのパーティーはいつもこのようにして進んでいく。

白馬岳は日本の山の中で一番人気のある山である。白馬という名前にメルヘンチックの感情をいだくのか、はたまた高山植物の種類が他の山域に較べて非常に多いからか、穂高岳の岩稜に対比し女性的な山容からか、とにかく人気が高い。日本最大の収容規模1500名の白馬山荘と1000名の村営頂上宿舎が2932mの頂上直下に建てられており、クラシック音楽に耳を傾け、ビフテキを食べながら生ビールを飲むなどという光景が展開するのである。私は食べたことはないが、実際にナイフとフォークで食べているのを目にすると、いやはやなんとも世界なのだ。

現在、3000mの稜線へも交通網の充実と山小屋の整備によって、誰でも簡単な装備で登ることが可能となっている。ハイキング気分であ涼やかな空気に包まれ、 Morgenrot に輝く山稜をまのあたりにすることができるのである。従って、昔の重いザックとテントを担いでの山屋の時代は遠く去り、色あざやかなウェアやザックが3000mを闊歩することとなる。それはそれとして時代の流れなのであろうし、クラシック音楽にビフテキも登山者の変化の現れなのだろう。

ま、それはともかく都会の雑踏と喧騒から逃れ、静寂な山懐に抱かれ精神のリフレッシュを行う登山行為は同時にレクリエーションとして楽しむものである。

—唐松岳山頂にて、後方は剣岳—

梶池自然園から登り始める。汗が額に滲み出す約30分を目安として、小休憩を兼ねながらゆっくり登って行く。天狗平から乗鞍岳へと進む頃、頭が痛いと訴える人が出てくるが、軽い高山病である。決して二日酔いではない。その痛みも暫くするとなくなるのだが、個人差があるため長引く人もいる。幸い私たちのメンバーは皆、すぐに元通りに回復した。

ただっぴろい乗鞍岳の山頂に立つ5m程のケルンによじ登って記念撮影する者も現れたが、視界がきかない悪天候時にはこれだけ広い山頂だと道に迷う人も出るであろう。今日は幸いにもまったく雲ひとつなく晴れ上がった快晴であり、これから向かう白馬岳の信州側の絶壁が遠望できる。

待ちに待った昼飯は綺麗に透き通った白馬大池畔の大岩の上での店開きとなる。コップで湯を沸かす。8人分の味噌汁を作り、周りの景色を眺めながらのひとときは、うーん、最高!となる。水面を渡ってくる微風が身も心も快い気分にしてくれる。

以前、このコースで雨の中を登った時は酷いものだった。池畔に建つ山小屋も雨を避けた登山者で立錫の余地もない有り様であったことが記憶の底から蘇ってくる。それに引換え今日はなんといい日なんだろう。

白馬岳、杓子岳、鍵ヶ岳と越えて天狗山荘の前の雪溪の雪解け水に乾いた喉を潤していると、「こっちに歩いて来る人いないね」という声がメンバーの中から聞こえてくる。私たちの歩いているコースは白馬岳登山者の1%程度しか通らない縦走コースなのである。これから、いよいよ不帰ノ嶮の悪路に踏み込むのである。

天狗の大下りといわれる急激な下降が現れる。これを逆コースから登れと言われたら、一瞬ためらう急激な下降である。慎重に下りきって不帰ノ嶮のⅠ峰の手前で昼飯にする。この縦走コースに入ってから出会った登山者は4人である。まったく静かなコースで、のんびり昼飯を食べながらⅠ峰・Ⅱ峰・Ⅲ峰と登るコースを目で追ってみる。

稜線伝いにⅠ峰を登り、少し下ったコルに立つと殆ど垂直にⅡ峰の黒い岩壁が迫ってくる。いよいよ核心部の岩場である。鎖、梯子、鉄橋などを連続して越え、Ⅱ峰の北峰から南峰に立つ。ここまでくれば悪場は通過したことになる。南峰上の休憩は文字通りのほっと一息である。岩場での緊張感は体験したものでなければ分からない感覚である。

Ⅲ峰を右に巻いて砂地の斜面を少し登れば唐松岳山頂に到達する。山頂から360度の展望の中で、北方にピラミダルに美しく聳立する劔岳がひととき目を引く。昨年の夏は劔岳からこちらを眺め、今年は逆に唐松岳から劔岳を眺めている。

山に興味を持たない人に山の感概を伝えようとしても無理である。黒みを帯びたぬける青空と雪溪の対比、あるいは雲の絨毯である雲海、刻々と変化していく夜明けの空の色、山稜をモルゲンロートに染める光の矢、どこまでも続くスカイライン、お花畑や登山道の脇に咲く可憐な高山植物の花々、人なつっこいイワヒバリやライチョウ、など挙げたらきりが無いが、それらは自分の感性で実感するものである。

宴会が始まる。山小屋から買って来たビールで、或いはザックの中から取り出したウィスキーで車座になりながら飲み始める。3000mの稜線上での宴会は様々な話題と共に酔いを速めていく。

1993.9.5. 記